

「日本では、ペットを飼いたければペットショップに行くのが当たり前。保護されている犬猫は『かわいそうな動物たち』というイメージが強いです。でもイギリスでは、シェルター（保護施設）から犬猫を引き取ってペットとして飼うことは、カッコイイというイメージすらあるんです。」

「日本人はペットにも流行を求め、傾向があり、次々と飼う動物を変える人がいるのも問題です。当然、『売れる犬種はどんどん繁殖させる！』となり、結果として体の弱い子犬が生まれやすくなるなどの弊害が発生しますが、その事実



▲東京ARKスタッフの山田桂子さん

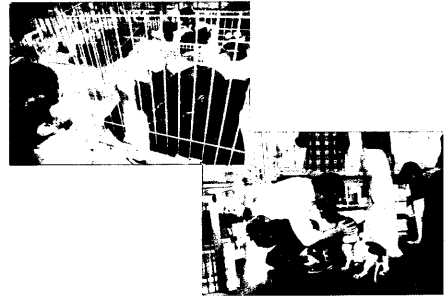
に入って、新しい飼い主を見つける仕組みが整っている。日本ではそうした仕組みが不完全なだけでなく、成犬を引き取ることに行政が消極的なため、本来は人に慣れていて飼いやすい成犬までが、たくさん殺処分されてしまうのだという。



▲大自然の中にあるARK本部には、木々に囲まれた動物たちのお散歩コースがたくさんある（写真は東京ARK代表、ブライア・シン普森さん）



▲500匹以上におよぶ保護動物たちのフードの種類、量、好み等は、担当スタッフがすべて把握している



▲里親会の参加者は自由に犬にさわったり、カゴ越しに猫と遊んだりしながら、スタッフやボランティアの説明を聞いて引き取る犬猫を決められる



▲里親会に参加したジャネット・スノーデンさん

「アメリカでもペットの扱いはひどいけれど、日本ほどではないわね」と話すジャネットさんの腕で、ユキはおとなしく抱かれています。

「アメリカでもペットの扱いはひどいけれど、日本ほどではないわね」と話すジャネットさんの腕で、ユキはおとなしく抱かれています。

ペットの引き取りをスタンダードに！

篠崎さんの家に預けられて元氣を取り戻したユキの新しい飼い主は、アメリカ人のジャネット・スノーデンさん。家ですでにテリアを1匹飼っているが、この犬もユキのようにシェルターから引き取ったという。

ARKでは里親が動物を引き取る際に、スタッフと会って面談をする。「事前調査書」に家族や住宅

NPO 法人 アニマルレフュージ関西
〒563-0131
大阪府豊能郡能勢町野間大原 595
TEL: 072-737-0712
FAX: 072-737-1886
e-mail: ark@arkbark.net

東京ARK
TEL/FAX: 050-1557-2763
TEL: 080-6517-8913
e-mail: tokyoark@arkbark.net
URL: www.arkbark.net

変遷者大募集！
ARKでは、団体活動を支援する「メンバー」や保護された犬猫を引き取る「里親」、犬猫の世話をする「ボランティア」など、多様な支援を募集しています。詳しくはホームページをご覧ください。

も隠してペットショップに卸します。ペットがビジネスの道具としか見られていないのです。」

「東京ARKでは年間100匹近くの犬猫を保護していますが、ペットを捨てる人やモノのように扱うブリーダーがいる限り、不幸になるペットは後を絶ちません。私たちが目指すのは、シェルターからペットを引き取って飼うのが当たり前という社会を創ること。そうすることで、不幸なペットを1匹でも減らしたいのです。」（山田さん）

「この子は悪徳ブリーダーのもとで、狭いケージ（檻）に入れられ、劣悪な状態で飼われていた32匹のうち1匹です。ブリーダーが事故で亡くなったために助けられて、自宅で3週間預かっていたんです。里親が決まって、今日、新しい飼い主のところに行くんですよ。」

「東京ARKでは年間100匹近くの犬猫を保護していますが、ペットを捨てる人やモノのように扱うブリーダーがいる限り、不幸になるペットは後を絶ちません。私たちが目指すのは、シェルターからペットを引き取って飼うのが当たり前という社会を創ること。そうすることで、不幸なペットを1匹でも減らしたいのです。」（山田さん）

「東京ARKでは年間100匹近くの犬猫を保護していますが、ペットを捨てる人やモノのように扱うブリーダーがいる限り、不幸になるペットは後を絶ちません。私たちが目指すのは、シェルターからペットを引き取って飼うのが当たり前という社会を創ること。そうすることで、不幸なペットを1匹でも減らしたいのです。」（山田さん）

「東京ARKでは年間100匹近くの犬猫を保護していますが、ペットを捨てる人やモノのように扱うブリーダーがいる限り、不幸になるペットは後を絶ちません。私たちが目指すのは、シェルターからペットを引き取って飼うのが当たり前という社会を創ること。そうすることで、不幸なペットを1匹でも減らしたいのです。」（山田さん）



▲ボランティアの篠崎恵さん



人間を癒すために飼われ、必要がなくなれば捨てられてしまうペットたち。日本全国で殺処分されるペットは、犬猫だけで年間30万匹以上にもものぼる。人々はなぜ家族として迎え入れたはずのペットを、安易に捨ててしまうのか。ペット支援に取り組むNPOの活動を通じて、日本のペットブームとその背後にある現代社会の姿に迫ってみたい。

「この子は悪徳ブリーダーのもとで、狭いケージ（檻）に入れられ、劣悪な状態で飼われていた32匹のうち1匹です。ブリーダーが事故で亡くなったために助けられて、自宅で3週間預かっていたんです。里親が決まって、今日、新しい飼い主のところに行くんですよ。」



Fusako Nogami

1949年、新潟県生まれ。1972年、北海道で暮らすアイヌ語とアイヌ文化に関心をもち、『生命宇宙』を創刊。『動物愛護』、『新・動物実験を考える』などを執筆。1996年、包括的動物愛護団体「地球生物会議 ALIVE」を結成、代表を務める。『ALIVE』誌ほか

野上ふさ子さん

無知や無理解で

動物の命を消さないために

に違いない」

「誰かが何とかしてくれるだろう」
自分の罪の意識を軽くするために、他人をアテにして捨てるのです。しかし現実にはそんなに甘くない。捨てられた犬猫は飢え、病気になる、事故に遭うか捕まって保健所に送られます。無責任な人たちのために、犬猫は苦しみ、ガスのボタンを押す職員は毎日葛藤するので。

動物を飼うなら、それなりの覚悟をもつこと。そして万が一飼えなくなるときは、手を尽くして、彼らが生きられる道を探してほしいと思います。

無責任に捨てる飼い主もいれば、そんな犬猫を救おうとする人もいますね。

大きなきっかけは1990年に「シロ」と出会ったことでした。シロは、飼い主に虐待されて捨てられ、動物管理センターに収容された後、都内の国立病院に実験用に払い下げられた犬でした。当時、動物実験となる犬猫の数は、年間約10万匹。シロもその一匹でした。

シロは脊髄神経の切断というつらい手術を受けた後、放置されていました。足ははいれなくなって曲がり、タコ糸で乱暴に縫い合わされた傷口は腐り、皮膚病にかかって



▲さまざまな動物問題に関する写真パネルを制作して、全国各地で展示会を開催。また、動物愛護管理法の改正や普及のために、勉強会や講演活動も行っている



▲保健所や動物愛護センターなどの収容施設を訪れ、犬猫の処分に際して殺処分から救命への方向転換を促している(写真は収容された犬たち)



▲瀕死の状態だったシロは、半年後、見違えるように元気になった

ヨーロッパでは動物保護が進んでいます。日本が学ぶべきことは何ですか。

動物本来の生態・習性・性格を理解することです。例えば日本では、ハスキー犬を南国で飼ったり、つないだままにしている飼い主がいます。寒い地方の犬を高温多湿の地域で飼い、ソリを引くほどの運動量をもつ彼らに運動をさせないというのは、間違った飼い方です。これは動物への無理解から起こること。
そもそも犬種を作り出した国々では、狩猟や牧畜を手伝わせるなどの目的が明らかですから、それぞれの犬の特徴をよく理解しています。飼い主は、自分のライフスタイルに合った犬を選ぶので、日本のような流行り・廃りはありません。ハスキー、ゴールデン・レトリバー、チワワなど、流行りが去るとたくさんの犬が捨てられ処分されている現状は、大問題です。
またヨーロッパでは、店頭で陳列されている子犬や子猫をモノのように買うのではなく、アニマルシェルターに行つて、処分される運命の犬猫を引き取るのが一般的です。このような文化は見習うべきでしょう。

街を歩けばいつも見かける犬や猫。しかし、ペットとして最も身近な犬猫の殺処分の実態を、私たちはどれほど知っているだろうか。長年にわたり、あらゆる生き物との共存を提案している野上さんに、犬猫たちが抱える問題や私たちにできることについてお話をうかがった。

動物保護活動を始めたきっかけを教えてください。

田舎に生まれた私は、家畜や野生動物などを身近に感じて育ちましたが、動物観の原点は「アイヌ文化」に出会ったことです。中でもアイヌの人々が語り継いできた神話、『カムイ・ユーカーラ』にとっても強く惹かれました。カムイというのは自然の神々のことで、さまざまな動物たちが神さまとして登場し、人間に語りかけてきます。動物も人間と同じような魂・言葉をもつ者として、尊敬されてきたのです。

しかし現実を目をやると、日本では尊敬されるべきクマ(カムイ)は狭い檻で見せ物にされ、オオカミは絶滅させられ、犬は捕獲され保健所で殺されている。
今、人間が動物に行っていること

とは間違っている。そう思い、生き物との共存を提案したいと考えようになったのです。
多くの犬猫が処分されていることは、あまり知られていないようです。

これまで北海道から九州まで、各地の保健所や動物管理センターを見てきました。実際、このような行政の施設は犬猫の殺処分が目的なので、見るのはつらいものがあります。特に犬には表情があるので、「助けてほしい」という訴えが伝わってきます。

元飼い主は、犬猫たちが動物実験にまわされ、生きながらにして身体を切り刻まれることや、ガス室に入れられ、もがきながら窒息死することを知っているのだから、憤りを覚えました。

今もなお、飼い主に捨てられた犬や猫のほとんどが殺処分されている現実を、まずは知ってほしいです。
なぜ犬猫を捨てる人が後を絶たないのでしょうか。

犬猫を捨てる人たちがよく口にしている言葉があります。「自力で生きていけると思った」「心優しい人が引き取ってくれる」
私たちが犬猫と、どう付き合っていけばいいのでしょうか。

犬や猫を大量生産、大量消費の「商品」にしてはいけないと思います。これから飼おうと考えている人は、ペットショップからではなく、できる限り動物愛護センターなどの行政の施設や動物愛護団体からもらい受けてください。そうすることで、悪質な動物取扱業者は減り、動物愛護センターなども「殺す施設」から「生かす施設」に変わっていきます。

私たちが事実を知り、行動すること、今日消えようとする命が救われるかもしれないのです。

活動写真提供◎地球生物会議(ALIVE)
文◎木村倫子 写真◎鈴木直子



地球生物会議 (ALIVE)

住所: 〒113-0021
東京都文京区本駒込 5-18-10-102
TEL: 03-5978-6272
FAX: 03-5978-6273
e-mail: alive-office@alive-net.net
URL: www.alive-net.net

署名募集中!
動物取扱業の規制や、保健所の環境改善など、動物虐待への対策強化を求めます。
署名掲載サイト⇒http://hogohou.net
お問い合わせ先⇒